

公立世羅中央病院だより



『リンパ浮腫』(1)

公立世羅中央病院 院長 末廣眞一

リンパ浮腫はリンパ組織の機能低下を主因とする、いつ誰にでも発症する可能性のある病気です。手や足の皮下組織にリンパ液が異常に貯留することが病気の本態です。先天性(原発性)のリンパ浮腫では生

時から発症しているものから、成人してから発症するものまで様々です。二次性のもは乳がんや子宮がん、卵巣がんなどの悪性腫瘍の手術でリンパ節の摘出を受けてから発症するものが多く、発症の時期はやはり様々です。手術直後から手や足が腫れ始めるものから、手術後10年以上たつてから発症する場合もあり、いつ起こるかわかりません。

リンパ組織とは

リンパ組織は血液循環器系とは異なり、末梢組織から毛細リンパ管が始まり、蠕動運動により血管内へリンパ液を送る一方通行の組織です。血管が上水道とすると、リンパ管は下水道のようなもので、体のゴミを運んでいます。リンパ液の中には細

菌やウイルスもおり、リンパ節で浄化して血管内へ送り込んでいます。

リンパ浮腫の頻度

リンパ浮腫の頻度は意外と高く、症状の程度に差はありますが、人口の0・1%の人がリンパ浮腫を患っているというデータがあります。悪性腫瘍の手術をした後では約2割の患者さんがリンパ浮腫を発症すると言われています。どこ施設でもほぼ2割の確率と言われていますので、手術の良し悪しではなく、患者さん側の素因によるものが大きいと言えます。

リンパ浮腫の原因

先天性のものはリンパ管の形成不全あるいは過形成が原因ですが、二次性のもは悪性腫瘍に対するリンパ節郭清によりリンパ液が流れにくい状態があり、これに水虫や巻爪による皮膚障害から細菌感染による蜂窩織炎が原因となりリンパ浮腫を発症することが多いと言われています。

また、ストレスや不眠症、アルコール、自律神経に作用するある種の薬などはリンパ管運動を低下させるため、リンパ浮腫を増悪させてしまいます。

リンパ浮腫の症状

症状は手や足のむくみで、初期は可逆性でマッサージを受けたりする

と改善しますが、病状は進行性であり、次第に非可逆性となり、皮膚が固く肥厚してきて、ときに蜂窩織炎を起こし、発熱、発赤腫脹、疼痛がみられます。また、皮膚からリンパ液が漏れだすリンパ瘻がみられることもあります。さらに、リンパ浮腫の患者さんだけに極めて悪性度の高いリンパ肉腫という癌が発生することもあります。

次回はリンパ浮腫の治療について解説します。



0期	潜在期 リンパ管は障害を受けているが、輸送能は正常範囲内で、臨床的に浮腫はない
I期	可逆期 浮腫は軽度で、柔らかく、押せばへこむ。安静臥床で浮腫が軽減する
II期	不可逆期 浮腫の程度が高くなり、繊維化で硬化して、押ししても圧迫痕が残らない。安静臥床では改善しない。
III期	象皮症 皮膚は硬化して、角化が見られる。象皮症と呼ばれる状態になる。